＜前回＞ヘレニズム・ローマ世界、グノーシス主義

（１）古代地中海世界の宗教的状況とグノーシス主義

１．古代の思想運動・宗教運動としてのグノーシス

二世紀から四世紀頃にかけて、正統キリスト教会と競合関係にあった宗教運動（キリスト教内あるいは外、異端あるいは異教）の総称（単一の運動体ではない。多様の神話体系）。エリート主義的傾向の「グノーシス」（認識、知識→高次の真の知恵）を探求する古代に広範に見られる精神動向の一翼を担う。正統キリスト教（パウロ）もこの動向と緊密な関係にある。

３．年代：

・Ｉコリやコロサイ（「2:8　人間の言い伝えにすぎない哲学、つまり、むなしいだまし事によって人のとりこにされないように気をつけなさい。それは、世を支配する霊に従っており、キリストに従うものではありません。」）→１世紀に後に正統キリスト教会と対抗する運動体としての「グノーシス」の存在を遡及させることは適切ではない。

「われわれが次に考察しようとする運動の前史」（マルクシース、98）

「「認識」に関する統一的な理解は二世紀のはじめのキリスト者の間では存在しなかったのである」（20）、「二世紀末になると「認識者」を自称する多くのキリスト教の集団を数えることが可能になる」（24）

「Ｉコリントにおけるパウロの論敵の思想は「グノーシス的」傾向を若干有してはいたが、未だ「グノーシス主義」となるには至っていない。」（荒井、1986、179）

４．起源（マルクシースより）

「「グノーシス」は元来キリスト教以前の運動であったが」「キリスト者であることを要求する人びとによって形成されたもの」（基本的に異端）／「最初からキリスト教外の、非キリスト教的な運動であって、たまたま一定期間キリスト教に順応したもの」（基本的に異教。ユダヤ教起源のグノーシス・ユダヤ教グノーシスを含む）

「一つの宗教」／「古代の哲学の基準へと方向づけられた、ユダヤ・キリスト教的宗教をいっそうよく理解しようとする試み」

「「グノーシス」とは明らかに古代の教養都市の中でキリスト教を時代の水準において説明しようとする相当教養ある人びとの試みから成立した。そのさい、ユダヤ・ヘレニズム的思想家が受容していたものを同時代の通俗哲学から彼らは引き継いだ。」（112）

初期形態／大規模な体系化（二世紀後半と三世紀前半）／頂点にして終点（マニ教）
　バシリデス　ヴァレンティノス（二世紀半ば）とヴァレンティノス派
　　プトレマイオス
　　ヘラクレオン
　　バルベロ・グローシス派
　マルキオン

５．展開・広がり。イラン・マニ教型とシリア・エジプト型

６．普遍的な精神類型としてのグノーシス

・「グノーシス主義は古代末期から近代に至るまで、地中海およびヨーロッパ文化の実にさまざまな領域、すなわちユダヤ教、キリスト教、イスラム教という歴史的世界宗教、神学、哲学、神秘主義思想、科学史などの領域において、表の文化に対する裏の文化として見え隠れしながら、連綿と影響を及ぼし続けた」（大貫、1999、305）

７．概念規定に関連して（用語の混乱に対して、合意形成の試み）

・「1966 年 4 月、イタリアのメッシーナ大学において、「グノーシス主義の起源に関する国際コロキウム」」「「グノーシス主義の定義によせて」と題する報告」（荒井、1971、337）

「われわれは、グノーシス主義におけるこのような原理的側面を、歴史現象としての「グノーシス主義（Gnosticism）と区別して、「原グノーシス主義」（Proto-Gnosticism）と呼ぶことに意見が一致した」」（346）

「グノーシス主義はそれに固有な Daseinshaltung に基づく創作神話を伴うが、その本質は次のような三つのモチーフによって形成されている。(1)究極的存在と人間の本来的自己は本質において一つであるという救済の認識、(2)その前提としての反宇宙的二元論、(3)その結果として要請される、「自己」の啓示者あるいは救済者」(350)

↓

堕落神話＋救済神話

（２）古代キリスト教とグノーシス主義

８．資料について（マルクシース、47-90）

・オリジナルなテキストを伝えるグノーシス批判の教父

・異端報告を行っているグノーシス批判の教父

・グノーシスのオリジナル資料：特に、ナグ・ハマディ写本（その一部がユング写本、コプト語)、トゥルファン出土のマニ教文書など。

・非グノーシス資料：ヘルメス文書、ヘーハーロート文学

９．ナグ・ハマディ文書発見の意義

1945/46 年に、上エジプトのハムラ・ドム付近の洞窟の一つから陶器の瓶に入ったパピルス群（５２文書を収めた１３写本）を発見。最も近い集落がナグ・ハマディ。

多様な文学類型：「トマス福音書」「フィリポ福音書」(語録福音書、Q)、「真理の福音」、「ヤコブのアポクリフォン」、「ペトロと１２使徒の行伝」、「パウロの黙示録」など。

10．正統キリスト教との競合・最大のライバル、キリスト教との共通性

・パレスチナからヘレニズム大都市へ

「ローマ、アレクサンドリア、アンティオキアといった古代の大都市」

Stark(2006)によれば、Rome(450,000)、Alexandria(250,000)、Antioch(100,000)

・「二世紀後半から三世紀前半にかけて、キリスト教はその授業を専門化させ、ちょうど通俗哲学の水準を上回る哲学の領域で一般的であったように、秩序だった授業計画と生徒と教師の共通した授業をもった安定した学校を形成するように努力していた」(146)、「「認識者」の小さな集団としてカリスマをもった自由な教師のまわりにあつまった。・・・この人びとはキリスト教神学が総体的に二世紀に立っていた水準にあって、三世紀の本質的な専門化傾向をともにすることはなかった。」(147)

「二世紀という時代はある種の実験室」「帝国の多様な片隅において才能豊かな諸個人によって、どのようにすれば古代の世界観市場に競争力のあるキリスト教神学に到達できるかについて、いわば実験が行われたのであった。われわれがここで「グノーシス」に数えてきた者だけでなく、多くの神学者が通俗的プラトン主義思想を使って実験をした。」(156)

・都市的環境、弁証的意図とその手段（通俗哲学と神話形成）

・キリスト教会が正統教会に収斂するプロセス＝グノーシスが異端として排除されるプロセス（論争的意図）

↓

12．反グノーシス主義の教父

論争の中の教理形成

13．争点、神話と歴史

・歴史的実在としてのイエスの意義と歴史的事実としての十字架・復活

キリスト仮現論、そしてグノーシスの多様な神話体系において、歴史的イエスの人格はもはや場を持たなくなる。

・創造の善性、神の唯一性（二元論に対する一元論）

（３）現代的課題としてのブノーシス

10．古代キリスト教２――

キリスト教迫害と弁証家たち

（１）教父とは誰か

Ａ．小高毅『古代キリスト教思想家の世界――教父学序説』創文社、1984年。

「ダマスコのヨアンネス（七九九年没）まで続き、彼をもって東方教会最後の教父とされるのである。では、西方教会に目を転じてみよう。ヒッポの司教アウグスティヌスは、四一二年以降、ペラギウスの異端に対処し、数々の著作をなしている。」(14)

「「教父」の概念の基準」
「①教理の面で正統信仰を保持していること（doctrinae orthodoxia）
②聖なる生涯(sanctitas vitae)
③教会の承認（approbatio ecclesiae）
④古代教会に属すること(antiquitas)」(20)
「教会の公文書、宣言のうちに信仰の証人として引証されること」(21)
「「教父学」という名称が確立するのは、一六五三年、ルター派の神学者Ｊ・ゲルハルト(Gerhard)の『教父学』(Patrologia)の刊行によるとされている。」(22)

Ｂ．ティリッヒ『キリスト教思想史Ｉ』（著作集・別巻二）白水社、1980年。

「使徒教父とは、新約聖書に直続する最も早い著作者たちであって、彼らのうちの何人かはそれどころか新約聖書の最も新しい文書の著者たちよりも以前に活動したのである。」(53-54)

アンテオケのイグナティウス、『ヘルマスの牧者』の著者ローマのヘルマス、ローマのクレメンス

「弁証家」「組織的な基督教神学の創始者」「特定に告発に対する返答という形式において、自己主張した」(65)

反グノーシス的教父（前回）、アレクサンドリア学派（クレメンス、オリゲネス）

＜文献＞

1. Johannes Quasten, *Pathology*, vol.1-4, Christian Classics, 1983-86(1950/1978).
2. Heinrich Kraft, *Einführung in die Pathologie*, Wissenschaftliche Buchgesellschaft, 1991.

（２）迫害と殉教の時代―使徒教父から弁証家へ

１．アンティオキアのイグナチィオス(35 頃-110 年以降、アンティオキアの司教)：
殉教の神学：殉教はキリストの受難の模倣であり、世の終わりにサタンを投げ打つ手段として代償の役割を果たす。イエスの行為の真実性を証明する。→日本の切支丹殉教へ

２．迫害→キリスト教弁証家とキリスト教神学形成
「告発は二つあった。第一は、キリスト教は帝国の構造の基盤を危くすることによってローマにとって脅威であるという政治的告発である。第二は、キリスト教は哲学的断片をまぜ合わせた一つの迷信であるという哲学的告発であった。」（ティリッヒ、65）
キリスト教神学の基本的営みとしての弁証

３．カルタゴのキュプリアヌス（Cyprianus, 3 世紀初頭-258）
カルタゴの司教（248 年に叙階）。251 年にデキウス帝の迫害で棄教した者を受け入れが問題化（カルタゴとローマとの論争）。256 年の教会会議で、再洗礼を受けさせるというアフリカ教会の慣習が再確認。

デキウス帝の迫害では地下に潜伏して教会を指導、ヴァレリアヌス帝の迫害で殉教。
「教会の外に救いなし」（Sallus extra ecclesiam non est）。
・古代アフリカのキリスト教
テルトゥリアヌス：三位一体論とキリスト教論のラテン語の定式化。晩年はモンタノス派（厳格主義）に入る。

（３）キリスト教弁証の意義

４．「二世紀の弁証論者のもとにひとは、ユダヤ教的―異教的環境世界による、もしくはローマの国家権力によるキリスト教へのとく知られた中傷と迫害に対して、はじめて文書による抵抗を示したキリスト教思想家のことを理解している。」（ヴァイシュラーク上、157）
「キリスト教の弁証への試みは宣教の始めからすでになされていたと言っていい。パウロの思想もヨハネの神学も福音の弁証から生まれたものである」「イエス・キリストとその十字架」「を福音として人に伝えるためには説得力のある説明がなされねばならない。それが弁証である。」（有賀、133）
↓
古代の弁証家と弁証一般
・近藤勝彦『キリスト教弁証学』教文館、2016 年。
「「キリスト教弁証学」は、キリスト教教義学、キリスト教倫理学とともに「キリスト教組織神学」を構成し、その基盤部分に、また外部世界に対する折衝面に位置している。」（653）
「キリスト教の真理性を教会外の世界に向けて論理的に、説きに論争的に主張し、その内容への導入を果たす」、「日本ではほとんど試みられることがなかった」（3）
「状況に相応しい学的努力」、「われわれの神学的問いは」「自らの現代状況に相応しく設定され、解答される必要がある」（21）
「キリスト教的真理の正当性を、その権利を同時代に生きる人々に主張すること、それが弁証学の課題である」、「回答する神学」「闘いの神学」（23）
「キリスト教的真理を人間とその諸文脈の中で弁証すること」「組織神学の中にその位置を持っている」（24）
「啓蒙主義以後の時代」「近代精神との折衝」（25）
「日本におけるキリスト教の弁証」
「一方では」「前近代的な日本の古い精神、儀礼、習俗に直面し」、「他方では近代の西欧精神の中から生じた非宗教化、無神論化、セキュラリズムに直面している」（27）
「教義学による啓示の認識に基づき、その真理性と権利を現代の状況としての世界文明や日本の諸問題に対面しつつ、その文脈に相応しく弁証」、「啓示の真理と弁証学的文脈」（28）
「ドグマの学としての教義学」「キリスト教的「エートス」としての倫理学」「キリスト教的「アポロギア」としての弁証学」、「三分野の神学を包括して「組織神学」となす」
「隠れた弁証学」「顕わな弁証学」（29）
５．「クァドラトス、アリスティデス、殉教者ユスティノス、タティアノス、アテナゴラス、アンティオキアのテオフィロス」（クラフト、350）
６．タティアノス（Tatianus）：ユスティヌスの弟子。「ディアテッサロン」（Diatessaron）のいう「調和福音書」の著者。シリア教会で５世紀まで使用。
７．「弁証学者たちの「哲学」は、覚知主義者たちの説いたグノーシスと異なって、キリスト教の基本信条である創造神の信仰、神の子の受肉としてのイエス・キリスト、その十字架、死、復活、再臨、および最後の審判、肉体の復活と救われたる者に与えられる永遠

の生命などを否定したのではなく、ただ能うかぎり哲学的にそれらの合理性を弁明しようとしたものであった。」（有賀、137）

＜文献＞

・筒井賢治『グノーシス――古代キリスト教の〈異端思想〉』講談社選書メチエ、2004年。
・大貫隆『グノーシス「妬み」の政治学』岩波書店、2008年。
・Ｃ．マルクシース『グノーシス』教文館、2009年。

（４）ユスティノス（Justinus Martyr, --165）

８．「プラトニズムとストア哲学を全面的に棄てたのではなかった。キリスト教の信仰に一致し、またそれの弁証に役立つと見られた教理は、かれも用いているのであり、したがってアリスティデスの場合と同様、かれの神論も多分に哲学的一元論の性格を帯びている」、「かれの神は人格神であるに違いないが、しかしそれは擬人的神観ではない。旧約聖書には擬人的表現が用いられているが、かれによれば、それは比喩的に解さるべきものである。」（有賀、135）

９．ロゴス・キリスト論

「神は超越的な「名称すべからざる」究極者」、「究極者から」「ロゴスが生まれた」、「この「生まれたるもの」として第二神ロゴスが万有創造に際して父なる神のために動作者となり、またアブラハム、ヤコブ、モーセ等に現われて神の意志を伝達したのである」、「そのロゴスが人になって現われた者がイエス・キリストである。そのロゴスの働きはイスラエルの範囲に限られていない」、「人間にはすべて「ロゴスの種」または「種子的ロゴス」が宿っている」、「キリストはロゴスそのものとして、哲学者たちに優っているが、両者は全く別の真理を示しているのではなく、ただ真理啓示の完全・不完全の差異があるのみである。」（136）

↓

10．アレクサンドリアのフィロンに遡る思想系譜（ヘレニズム・ユダヤ教）

11．キリスト教のギリシャ化（ハルナック）？　あるいはギリシャのキリスト教化？

学問的神学としてのキリスト教思想、しかし、キリスト教的視点から選択が行われた。これ自体がキリスト教形成の一つのあり方ではなかったか。

弁証家の方法としての「相関の方法」（ティリッヒ）

12．宗教多元性におけるキリスト教（古くて新しい問題）、包括主義？

「キリスト者が自らの宗教を他の誤った諸宗教と並んで存在する――たとい真正の宗教であっても――一つの宗教であるとは見なさなかった」、「彼はキリスト教を完全なロゴスの出現のなかに基礎づけた。つまりキリスト教は、すべての宗教の否定克服であり、まさにそのようなものなるがゆえにすべての宗教をそのなかに包括しうるところの普遍的真理の時間空間における出現に基礎づけられるのである」（ティリッヒ、70-71）

「彼のなかにあらわれた基本的真理がその本質において普遍的なものであり、したがってその他のあらゆる真理をそのなかに含意するものであることを意味する」（71）

＜参考文献＞

１．『使徒教父文書』《聖書の世界》新約II別巻４、講談社。
２．『中世思想原典集成』平凡社。
３．『キリスト教教父著作集』全22巻、教文館。

４.『キリスト教古典叢書』創文社。
５．Ｈ．クラフト『キリスト教教父事典』教文館。
６．小高毅『古代キリスト教思想家の世界　教父学序説』創文社。
７．有賀鐵太郎「使徒教父」「教父哲学」『信仰・歴史・実践』著作集６、創文社。
８．水垣渉『宗教的探求の問題』創文社。「第二部　ユスティノスと探求の問題」
９．柴田有『教父ユスティノス　キリスト教哲学の源流』勁草書房。
10．ティリッヒ『キリスト教思想史Ｉ　古代から宗教改革まで』著作集別巻二、白水社。
11．Ｈ・チャドウィク『初期キリスト教とギリシア思想』日本基督教団出版局。
12．Ｋ．バイシュラーク『キリスト教教義史概説』上下、教文館。
13．芦名定道『自然神学再考』晃洋書房。
「第一章　古代キリスト教神学の成立と自然神学」